



方金屋主人蔵書

大日金三郎先生を憶ふ

先生が亡くなったのは翌日、即ち昭和七年九月八日の若戸屋新聞夕刊に
は、左の悲しき知らせが掲載せられた。
大日金三郎氏 若戸屋市東區東横木町七丁目大日金三郎氏は七月廿十一
日自宅で急逝し、享年七十、九月午後三時、若戸屋市東區東横木町
近藤山平で告別式を行ふことになった。
氏は信氏、又は飯蘭居と稱し頭銜、上総、菅原の若小學校校長を歴任
し故實原に多大の功績あり、老後は若戸屋市東區東横木町に寓り
所春五月脱稿の豫定であつた、彼が會を興く、其の筆を執筆し、最近
は徳川家に入り藩史編纂、資料の整備に當り、新國法人尾川徳川家
會の設立といふに美辭館主佐とけり大日の圖書館地鎮祭を以て待たし
てゐたが大日午後、眼病を訴へたのが早退さへて静養を命ぜられた。
のである、氏の實家千賀家は舊尾藩重臣で、新藩奉行を勤められた。
氏の最後の著作は「宇都宮三郎先生経歴談」の旗幟であつた。
當時私は、此記事によりて始めて其の事を知り、大いに驚くと共に、再
び得難き銅土の人物失策を永久に哀つた事を深く惜んだ。先生は、其書が
得意で能書家であつたが、歌人といふには又特に有能であつた。然し我が

尾張の大蔵坪の遺愛博士とは嘗ての昔かりし日に同窓であつた事は、
 りに一紙に知らせられてゐるやうだ。

病が起つて先生を知つたのは、今から五十年前の天正十二年頃のこと、秋十月かと思ふ。其頃新尾張本陣澤の大家水谷誓文翁の筆跡、請書に懸命であつたが、或日フット町前所の古書肆其中堂で、初對面の懸元廣次郎氏から先生の筆を聞き、同氏の紹介を以つて其夜七時半頃成つた。先生宅翌代官町十二番地、代官町の水筒屋通より曲る南西角、今の日南岳雜貨を對する雜商店の家に訪つて、色々を指教を仰ぐのが抑々である。爾來先生の御援助で、御蔭を四年後の昭和二年に、さうしたる小舟子ながら、日本各警文翁大偉に、皆快を見るに至つた。先生も大欢喜で下さつた。

私が先生を訪問したのは、南もななと、先生は富士燈所二丁目七番地
楊山高等女學校南、東側の兩所へて歸宅せられた。その大抵の事も何
にかにつけて不審があれは其都度尋ねにあがり、不難誌を發行の時など
も御寄稿を賜けり、等々、一方ななは御厄介に存つた。故人は拙き私の
ななと文の勝算版に付して、深き理解と同情とを寄せられて、種々激
勵を賜はつた。私が本草家の傳記調査をなす所から、吉田平九郎翁
の墓譜を杉村町の小塩三郎氏（本草家小塩五郎翁の弟、今は故人、篆刻

を著しくし、子孫は南區豊田所方衛へ移居す。が、猶ほせられ、いふので、同道と同氏宅を訪問紹介し、下さう仕事もあつた。

そゝを私に、其後生活の表新なり、久しと、街並、沙汰に打過き、たが、最近
編又、ひ月、趣味社と、いふ會を組織するやうになつて、其講師に、と昨年八月
二十三日、夜、勝手倉から訪問し、其所、家入の方より、街藏氣を聞ひて、又
街願ひするこゝとし、心ひそかに其全快を祈りつゝ、あつたが、其後某種
水廻り、街轉居に、なり、街快方との、街、かキを頂りて、是づは安堵し、お目
に掛る日も近からんと樂みに、いふ、居氏のであつた。秋、計りざる突然の
街遊者であつた。

私は今更に入の世の儚さをかこつて矢に、今や生うゝなりし長松院前
節日全居士の笑霊に村々、瀟湘の菰悴の意を表するのみである。

後掲遺稿に、孰れも私の爲り當て雜誌に却寄稿を賜はつたもの、就
中「我が尻張の生人」が偉人、柳河春三と宇都宮三郎との一文は、未完と
は言へ、是が最後の著作で宇都宮氏經歷談と由縁深かりぶるものあり
其後半は未發表のものあり。

若く幸にしも本所子に概概ともなつて、先生の第二第三の遺稿が續刊
するにともなうば、獨り銷土人士一般のみの喜びでない。少くとも我
が學界を輝かし、貢獻するの事大なりべしと確信する。



六丁佩蘭翁の死を悼む

松村 静雄

なまけきつて、その心に、たとへば、野合して花園の類をみるにも似て、
愛憎と悔恨と、さうして落葉を舞く刻みつけたのは、火日金三郎翁の
急死のしらせだつた。

あつた、翁をうせた永井以保翁の存命の頃、私は國を離れて通つた、
古本屋の奥で紙束の底を這つたり、かつての古本屋が持つた文化の
歴史の跡をたづねて、それでも、あれほど完備した古本屋市街のなか
に、さういふ誤謬をみつければ、小筆をさくさくさせてゐた。

さういふ、命に、書き、記し、記し、記し、記し、記し、記し、記し、
悔やうとも及ばず、いつか、いつか、いつか、いつか、いつか、いつか、
たり、かづけたり、かづけたり、かづけたり、かづけたり、かづけたり、

前翁だつたが、その金三郎翁にも、故といふ文字をかむせねばならな
なつた。

それうの、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、
全く半義通りの生半引を、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、
多くがあつたのだ。

あれやこれやと、翁の死を知つた八月の午前一時ごろ、翁の新居に、
翁と最後の訣別を、ねんごろに、ねんごろに、ねんごろに、ねんごろに、
さういふところを知りなかつた。

帰宅して、ほんんと、ほんんと、ほんんと、ほんんと、ほんんと、
かたき、かたき、かたき、かたき、かたき、かたき、かたき、かたき、
経文を讀んでゐた。静かな。

ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、
前の日に倒れた翁が、病とち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、
に頼まれ、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、
と、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、ち、

新になつた、水が、水が、水が、水が、水が、水が、水が、水が、
風に倒れた翁が、紅い花の、紅い花の、紅い花の、紅い花の、
つてきた。

吉川新町 昭和七年九月九日刊

稿

三村森軒先生

電車の往來繁き、新柴野、東新野停留所の少し東の方、北側に照蓮寺といふ曹洞宗の寺がある。此寺は元は禪寺所といつた。即ち此所の一寺で在つたが、今の火道路の南かたの時、其道筋に當つて寺の地を削られ、現今の如く新柴野の北側に小規模の堂舎を存する様になつた。俳諧で有名な井上士朗の墓があるが、特に有名な寺である。此寺の墓地の西北隅に、三村氏歴代の石碑がある。三村氏は尾張藩士で百石を領した家である。舊邸は御園所、即今の御園で代々學者を出した家筋である。

森野先生は、通称幸八、府を陳寔といひ、森野は其號である。寶曆十二年十一月三日、七十二歳で歿し居られたが、松平居山先生よりは大歳の年長である。本草藥物に精しくかつ大趣は碑文に見えて居るが、其の事蹟は知ることか出来ぬ。古の人知を賣らず、利を求めず、唯其學を究むる事をのみ己の天職として努めたものである。かゝる愿はれたる學者の名を世の中に紹介するは、後進の一鼓舞であると思ひ、碑

の全文を左に掲げて、同好の諸君に示すのであす。

蘇軒三村居士墓

先君姓三村、名陳壽、字幸八、號蘇軒、奉仕尾陽侯幕府數十年、致々勤功、四轉司職、四賜殊恩、其志誠義氣也、又何贊焉、其君平生耽讀本草、上有相履氏、下近、歷代諸君、無不尋窮焉、故華夷之產物、靡不悉討論、其正詳、加之、至彼種樹培茶之精工、則雖古郭景純、何能過之、世推稱和漢藥石之鑑賞家、不亦宜哉、今歲歲曆壬午仲冬初三、疾而逝矣、年七十有二、乃葬城南擇利巷顯運井先塋之側、與余輩有莫蘭之交、茲不堪悲、聊揮毫於碑上、以誌其高識、時維臘月之於不杌云爾、尾陽散人寧紫芝書

(大正十四年四月廿三日(月)發行。植柳之友、第三輯所載)

墓淋、く蘇訪、吉田平九郎先生

吉田平九郎先生は、尾張藩士である。幼少を世良太叔といひ、若くは高

憲、號を菴業庵といつた。作菴主翁先生も兄弟せうに、大垣の飯沼總春先生も示教を仰がれた、本草の大豪である。文政六年十二月四日、七父平九郎の橘百石を相続し、樹馬頭領となり、同七年二月廿九日、寄合組となつて、一代を終られた。同十三年七月十一日、先代の名を襲つて平九郎と改められた。先生は本草の外に好古の癖があつて、當時若くは尾知名士の教けて居た同好會の一員で、毎月集會を催し、珍品異書を携ち寄つて研究せられたといふ事である。稱には一丁し、画が世間に現つて居る。安政六年八月廿四日に歿せられたが、年數は分らぬ。大十歳前後ではなかつたかと推測するのみである。法若と秋興院地岳奇雲居士と云ふ。墓所は内前所七井の墓地区にあるが、今は子孫も無いといふ思はれる。小堀也哉先生も若く時分、教を授けられて、一旦は其養子となつたといふ、存る等であつたといふ間、其墓がある。前運の通りで春花を平所ける人も存り構である、有志の士で墓の保存や、追振の道を繼せられた事である。

同に編者云、吉田先生は、當時中區内前所七井墓地区にありし、其後同寺墓地に移葬に伴ひ、目下は八幸山七井共同墓地内に在り

(昭和三年丁酉十月廿日發行。植柳之友、第三輯所載)

名古屋の生んだ偉人 柳河春三と宇都宮三郎

名古屋は、徳川氏時代に在つては、三百藩侯の首班たる尾張侯の城下
 故に、三百藩侯、政治家、武人、學者、高僧、技藝家等、数多の人物を
 出くし居る。其中明治の前後に在つて、風に西洋の學術を修めて、各々
 面に貢獻した三偉人がある。

三偉人とは柳河春三、宇都宮三郎、曰く柳河春三、曰く宇都宮
 三郎の三先生である。若く此の一人が、或る小都會より出身したとす
 れば、其土地の人は大なる誇りをもつて、其生地を記念碑を建てるとか
 銅像を建てるとか、大騒ぎをくち、青年の模範人物と崇めざるであらう
 然るに名古屋の人は、尤も誇りとする所ではなく、かゝる偉人が此土地
 の人に出たといふ事、殊に知らざるが如く、他所の人が、華崇し研究
 するにも係はらず、我れ南に馬の進んであるのは、實に冷淡の極とい
 はねばならぬ。

然るに三偉人中、柳河春三は九十九歳の長壽を享け、理學博士の學
 位を受け、大學名譽教授に推され、特に盧鑒なる明治天皇の恩召に依つ
 て、華族に列せられ、昇爵を授けられたれば、學者としての上の榮譽

を前じ、所謂功成り名遂げの偉人である。随つて明治十二傑を始め、先生
 の詳傳は、既に世に出でゐるもの、又今續出づるものも有つて、世界の
 大學者の一生を窺ふ事も難くないのである。

然るに柳河宇都宮三先生は、やゝとすれば世人の記憶より忘れられ
 るとせざるが、幸にも柳河先生は、生前の親友成島柳北翁に依つて、幾分
 の事蹟を傳へられ、又近年余の大審院判事尾花竹雄君の、熱心なる研究
 に依つて、世に新蘭雜誌の創始者柳河春三の好著を得、爾來各新聞社の
 着目する所となり、其各種の著書も、近時頗る價を昂りたりといへば
 處々に柳河先生の行はるゝ事と、密かに喜ぶ次第である。

宇都宮先生は、同氏自述の可中、都宮氏經歷談に、明治三十五年二月
 東京支那社より出版せられた外は、僅に同文館の工業大辭書に、其略傳
 が載つて居る位で、各利に渡りであつた同先生は、我が國工業界の大恩
 人たるにも聞けらず、漸く世の知られ忘れ去られむとするは、嘆かばし
 る至りである。

余は、今柳河先生の事蹟を記し、かゝる偉人が我が名古屋より出
 て、然かも名古屋に居られずして、却つて紀州藩や幕府の用をなして、
 延びて明治に及び、世の南頭に貢獻したる事、頗る多大なることを告
 げんとするつもりである。

柳河先生は、天保三年二月廿五日、名古屋大和町へ余の西區茶屋所三
丁目への町家に生れた。父は西郡武英衛といつた。改に春三と、幼名は
西村辰助で、後に春三と改稱し、安政三年廿五歳で江戸に出た時、柳河
春三と改められたのである。昔は東名、又は名乗りと稱へて、あらたまつた
時に用いる名があつた。春三のそれは、朝陽又は旭、後には春藤とし、
又職とも書いてある。雅號は危園、良庵、楊江、其外澤山ある。又其時
々に用いた戲號も色々あるが、今は略する。
京都寄先生は、天保五年十月十五日、名古屋流川の武世の家を生れ、
父は神谷半右衛門義重といひ、高百石の御本丸番であつた。先生は其三
男で、幼名は銀次郎、十六七歳の頃、旗本の上苗字を京都寄の本姓に襲
ひ、小倉次と稱し、安政四年江戸に於て尾張藩を脱する時、鎖文進と
改稱し、義紅と名乗り、明治に至つて三折と改められた。雅號を錦堂、
又秋水園といふ。
柳河先生は、非常の神童であつた。生れて二十箇月で、既に筆を把つ
て字を書いた。父母は之を奇とし、其頃有名の書家丹羽整軒子に入門
させたが、数日ならず、書をうつく成つた。是れは其頃評判が高くて、
遂に君侯の耳に入り、三歳の時、前藩主源順公の新御殿に召されて、御
前揮毫を申付つた。聞きに違はぬ能書に、公も深く感ぜ、お側の臣下

奇れものとして揮毫を求め、數十枚に至つた。最後に公より一枚を所望せ
られた時、丁もういやになつた。公は彌其才に驚き、此の
如き神童、若くして僧となさば、大知識になるべしといはれた。依つ
て侍屋の者より、其事を傳へた所、先生は僧侶たる事を嫌ひ、さり進
居侯の思召、背く譯にも行かず、弟を代りに僧とく、先生は伴藤吉介
先生の弟子となられた。其頃の事か、母に伴はれて大丸屋の表を
通り、丁がイグワムヤと訓む故、母は之を諭して、丁がイマルヤとで
あるといへども、中々承知せなかつた。その事である。
先生は伴藤翁の所人となり、何歳の時か明かならぬが、天保十
二年、十歳の時には、既に翁の撰なす洋字篇の終訂者として名を利ね、
十二歳の時、西洋砲術の書を著し、洋砲の必須を説き、嘉永三年十九
歳の時、上田藩万仲敏先生の薦に、西洋砲術候覽を撰じた。係し同書に
は、上田藩万仲敏著、西村良三朝陽補といふ。
上田先生は、国学者で歌を善くし、又蘭学を修め、西洋砲術を創りら
れた。其夫人千村氏甲斐子に、特に歌才に秀でた蘭学歌人であつた。柳
河先生は、伴藤翁に蘭学蘭学を學ばれ、又上田氏の邸に出入して蘭学を
修め、且つ国学をも學んで歌を善くせられた。京都寄先生と親交を結ば
れたのは、多分此時であらう。

宇都宮先生は、武士の家に生れられたが、型の如く斬りより大武の
道を學ばれた。當時の藩費頭倫堂には、三年程通はれたが、藩費が極
で、始終憂鬱をもち、先生達に叱られて計り居り、僅中の名高いあはれ
者で、自分にも學問は不何と感ぜ、通學を願ひ、專ら武藝の方に力を注
がれた。就中好んで小川流の砲術、轉々流の組打、甲州流の軍法を學び
飯術、鎧術をも習はれた。組打には餘程精進し、三年間稽碌に凝ずし
て、各人の項に達し、とうと勉められたといふ。
其内、前述の上田伴敏先生が、西洋砲術を講ずるを南りて行き始め
處、今迄習つた和流の砲術とは違つて、少し學んで見ると、此も同日の
論でなり。夫故今迄の和流をさつぱり止めて、西洋砲術に替つた所が、
當時は西洋の事を會戰の如く軍人だ辨代故、父親は頑として之を禁止し
た。幸に姉上の中書で、辛うじて許され、夫より毎日上田邸に往き、色
々西洋の語を聞き、大分砲術書を讀む中に、化學の必要を感じ、化學を
は後に宇都宮氏が命名した。其頃は金鑛學、或は離合學をいつた。是に
於て畫成西洋砲術と離合學とに没頭した。
昔は武士と野人とは、身分が甚しい相違で、互に交際を結ぶ事はな
つた。佛し春三は、既に醫生であつた、蘭學の爲に上田邸に在つた時故、
宇都宮先生も其天才に敬服し、春三も亦宇都宮の常人ならざるを看破し

て、互に相許し、莫逆の交を結んだものであらう。或時藩士の砲水ハ三
銃と、少人か、若者の多勢居る處で、此所に「アゲホ」が一種
の多く喰ひ人があらば、復美として一席の酒肴を馳走せむ。佛し若し
やう喰ひがば、其代を辨償し、罰金刺米を出さねばならぬ。誰か喰ひ
者があつたといふ。如河宇都宮の兩人、それは面白し、皆れ平げむ。され
ど其數何本にやといふ。砲水の曰く、是れは有未規則あり、先づ其人の
左の食指の本の皮に線を七巻半巻いて、其線を輪にし、其中に入るだけ
の「アゲホ」を喰ひ事なり。但し喰ひ終る迄は侯所に行く事を禁ず、
又茶を吞むことも三杯に限ると。兩人の思へるやう、アゲホが喰ひは我
指の本の皮の四分の一には過ぎぬ。然れば大約三四十本なるべし、何條喰
はれぬ事やあると、直に之に應じたま。さてアゲホが喰ひを異し、線
にて縛つて斯定すれば、有本餘あり。兩人案に相違せしが、今はせん方
なけれは、此れと思ひなかり、喰ひ始め、二十本計は稱く間に平けた
が、次第に難はたると、齒は痛んで、半分程喰つた時、最早速見ると、矢
止の有様になつた。砲水の云ふ稱、さてアゲホは、口には似余は、稱中幾分さ
と。此一言に怒を發して、宇都宮は、昔れ幾分時元めども、喰ひで置
くべきかと、いふに、並居る人々、腹を抱えて打笑つた。されど宇都宮は
六十八本、新河は七十三本で降参し、新の如くに罰金を出だした。此面

人の真けめ氣は、此一笑話でも知られる。
嘉永六年に、米艦が浦賀に来て通商を請うた。是が海防の事か
やがてその成て、尾張藩でも江戸表の御用として、藩士大人に出張を命
じられた。半都宮先生も其一人に選抜せられたのである。是は曠る先づの事
で、當時七十歳の父親も、非常に武士の面目として喜ばれ、先生自身も
萬一の場合には、一死国に報ずるの覚悟で出立せられた。江戸着後は、
在府の者に砲術を教へたり、彈藥を製造したりする傍ら、有名者の砲術家
や、蘭學者に廣く交際し、又蘭學の大家杉田成卿先生の門に入り、同藩
なると石河家の家系、大脇道助にも蘭學を學ばれた。
先生がまだ國に居られる時に、着弾彈を工夫せられた。それは彈丸を
打つて、何にでも物に當れば破裂するものである。併し之を試験するに
は、中々金がへりやう、さういふ試験する事も出来なかつたが、江戸に出
て後、戸山屋敷の原でいさゝか砲を用いて、試験し、好成績を得られた。
此を江戸警衛の隊長、渡邊半十郎が、君侯に申し上げたので、君侯は廣
美とて、両手に餘る程の賞金を、紙に包んで下された。
此渡邊半十郎といふ人は、後に新左衛門と稱し、一萬石の今の渡邊男
爵家の父で、三千石取であつた。世に青松某といふ家である。此人非
常の英傑で、夙に洋式を以て矢の訓練を行ひ、家政は不如意な中から、

大砲を鑄造せられた。後明神元年正月、佐幕黨の巨魁と目されて、名を
屋敷中に斬られた。惜しくもべき事であつた。

(以上、昭和三年、東京植物學會發行「サイエンス」創刊號所載)

當時江戸で、西洋砲術の大衆といふは、江戸太田左衛門と、下曾根金
三郎とであつて、鑄造の砲術を學ぶ者は、皆この両家の門人であつた。
兩家は互に競争の姿で、砲術を研究して居るが、江戸で前物を建て、
夫へ彈丸を打ち込むと、直ぐ破裂するといふ事を發明し、築地で之を
造つた。下曾根の方では、これが出来ぬので、残念がつて居る。所で之
を聞いた渡邊半十郎が、それは我が藩に半都宮小倉次と云ふ者が、とつ
くの以前に發明して、此項でも廣く試験して居る。そんな前物でなく、
水の中であらうか、地面であらうか、物に中りさへすれば、直ぐ破裂す
るのであると語り聞かせた。下曾根では、之を聞くと、其門人の中に三
十餘人が、半都宮先生に神文を書き、血判をくく、弟子となつて教へる
仰いだ。そこで先生は、是等の人を連れ、大森の所打場に往つて、各
種の大砲を用いて試験し、獨自信を得た。總して當時西洋砲術は、着弾
彈ばかりでなく、普通通の砲術でも、尾張が握んで進歩して居たので、
毎日先生の許へ教を受け、相談に来る人の飽間がなかつた。

然るに當時鐵砲模倣の論がやりやうとして、尾張藩でも其論を主張する
人が勢力を得、西洋砲術をも廣くさせる構に成り、遂に大人も國許
へ召し戻され、事に成つた。宇都宮先生の考へるに、今この西洋砲術は
大抵の學術である。假令一息は中止するとしても、後には必ず用いねば
ならぬ時がある。其時に至つて再び始めよう構では、既に時勢後れに成つ
て、折角進歩して居る尾張藩が、他藩の下に付くのは残念である。もし
許されぬとしても、昔は止まつて砲術の研究を怠るなとて、砲術修業の願
書を出さうと、用いられた。遂に安政四年に藩を脱した。
當時宇都宮先生は、知人が諸藩に澤山あつたから、尾張を脱走して、
暫く地方に潜居し、名を宇都宮鉦之進義綱と改めた。そして安政五年の
春再び江戸に出たが、當時江戸が主修で、櫻の馬場の大砲製造場で大砲
製造の時であつた。先生は其鑄造方々、地金の事を論じ、今鑄る所の
大砲は、物の用にもたぬと、鉦取傳次郎といふ人に語つた。鉦取は、之
を其主人の遠藤但馬守に語つた所、但馬守は、彼人宇都宮鉦之進は、大
砲鑄造の事に精よく者故、委細聞き取れと申達した。そこで先生は叫び
出た。此大砲は、江戸の高第女人を相手にして賣問に答へ、大氣焔を吐いて
一介の書生に論難せられて、藩に障るから彼は狂人である。氣遣ひは大

切の事を聞いても、何にもならぬと申し出た。すると但馬守は、狂人
であらうか、何であらうか、其道に堪能の者だから、尚ほ詳しく承れと
言達した。再び叫び出された。
そこで今度先生は、大砲の地金の良否は、分析せねばならぬ。第一
鉛と、硫石を含有するや否やを、分析試験するが大切であると言はれ
た。大で逆に試験を受けて試験所を設け、自ら試験を製造し、七ヶ月を
要したが、其間に他藩の試験を行つて、皆々の目を驚かし、然に心服せ
られて、地金の分析に成功した。これが吾國に於て、始めて定量分析を
行つたのである。
其頃英吉利軍艦が、品川沖へ乗り込んできた。江戸の役人が其艦へ行
つて、廢條藩を一本貰つて来て、先生に面会し、斯ういふ物は出来な
いであらうかと云つた。先生は之を見て、其藩を確り、道に三四十本を
製造して試験した所、好成績を挙げた。江戸は是が厚に功を待た
ず其廢條藩を英艦に持ち行きて見せた所、僅に一ヶ月もたぬ中であつ
たから、英艦でも大に驚嘆した。其の事である。夫頃先生は江戸の春分
に居られた。此時先生は廿五歳であつた。
御河先生は、所々屋に在つて、嘉永六年上田先生の厚に譯した砲術便
覽を發行した。總て先生の著譯に係る書は、皆先生自筆の版下で、勿論

さき水際で十三間半、幅は約五間程の三本橋の帆船であつた。水野は此
船を造るには一萬兩以上の費用を掛け、進水式に艦が横に卧て仕舞
ひ、乗る事も出来なかつた。漸くの事多勢で起つて、浮かへば
水野は、天下に事先く軍艦を造つたのに、此の如き事では、幕府始
めへ聞かぬが、悪く、何んでもかでも、江戸へ回航し、此に當
る人がなり。大脇は、此上をうすれは宜い、見込もなめし、新嘗で
はさつげ、信用を失つて、再び頼が寄られぬ。併し水野は、どうして
も艦は江戸へ回航せねばならぬと種々心配く、春三に相談せられた。
春三も是は中々大ケい事であるが、自分の親友、半都衛館之進をらげ
遣るかも知れぬ。一つ頼んで見ては如何と答へた。水野は誰でもあれ、
回航して来て榮れは宜い。是非頼んで榮れおとす事だ。春三は半都衛
館の事は一切全權を委せる故、義侠心を以て引受けたと新説した。
半都衛館は、自分を見込込んでの餘儀ない頼み、武士の意地とくても引受
けおぼらぬ、快く受諾して、それから、江戸の海軍方の教官を計ひ、
中津藩次郎、柴廣吉に就いて、艦操縦の秘訣を三ヶ條を聞き取つて、う
人宜くと深く自ら期く、威儀堂々とて紀州へ乗り込んた。

再鶴丸は勝浦といふ所に繋いである。半都衛館先生は、人々に自分は船
の事は至つて巧者である、と吹聴して安心させ、一人心は不安なから、一
應艦を點検して繪圖を製し、遂に艦を一掃を改造した。此時は丁度安政
六年二月で、大月になつて改造が出来上つた。そこで、そこで、そこで、
に好成績であつた。さて、彌生帆、大が、此時先生心に思ふ所、萬一風都
合で漂流するとも、針路さへ違へねば、長崎通館間の何處かへ着かうし
萬々一難風に遭つて遠く流され、亞米利加へても漂着すれば、萬々一
白米は多数積み込んであるが、食料の心配はな。只海岸近くは危険だ
が、何んでも船は遠く沖へ出ず、限ると考へ、紀州の南を指して山
の尾をぬき進み、今度、東に方向を轉じて進んだ。遂に計つて見ると、
一時間に一里を駛つて居た。此時、今度、半時計は、三十間位仕た故、
其頃の三十間といふは中々の大倉で、書生などの身分では及ぶもつかぬ
事であつた。それで、砂時計で時間を計つたのである。
航海中に極難航であつたが、終つた、艦を釣つたり、難を釣つたりを行つ
たが、半都衛館先生は初めから、始終水夫の言動に注意を拂つて居た。す
るゝ水夫等が集つて話して居る。これば、いふまでも無い、此處は、
の南の沖に達しなかつた。そこで、水夫等は、そこで、水夫は、
歸して行くと、山が見えぬ。すると水夫は、やあ、あれは天城



に遣い無いと。先生は何か何んが、船には酔つて苦しいが、我慢して甲板に出て、船は今作意の沖に在る事は確である。己れは山の事は知らなれど、黄精達はよく承知して居るから、氣を附けて浦賀へはいる様にせよと命じ、大目目に恙なく浦賀へ入港した。それから品川沖へ入り、碇を置き置いた如く、帆を下ろさせ、船の情勢のある内は後方に回轉し、碇を下させ、するも海軍所まで遠く之を見、あれは西洋の船だ、ア、イフ手際のもの、日本にはない、何国かの船かと、海軍所の人が乗り付けて来た。藤藤太郎（後安房）なども来た。處が日本の船であつたから、皆々驚き入つた。先生は此報酬を、水野の金三百兩を贈られた。船をいふ事に關して何の知識も持たなかつた人が、二三ヶ條の要訣を聞いて忽ち自信を生じ、此難事を無事に遣つて退けたのは、僥倖をいへば僥倖であらうが、夫に、それ如何に先生の非凡の人であつて、且つ大膽であつたか、窺はれる。

(未完)

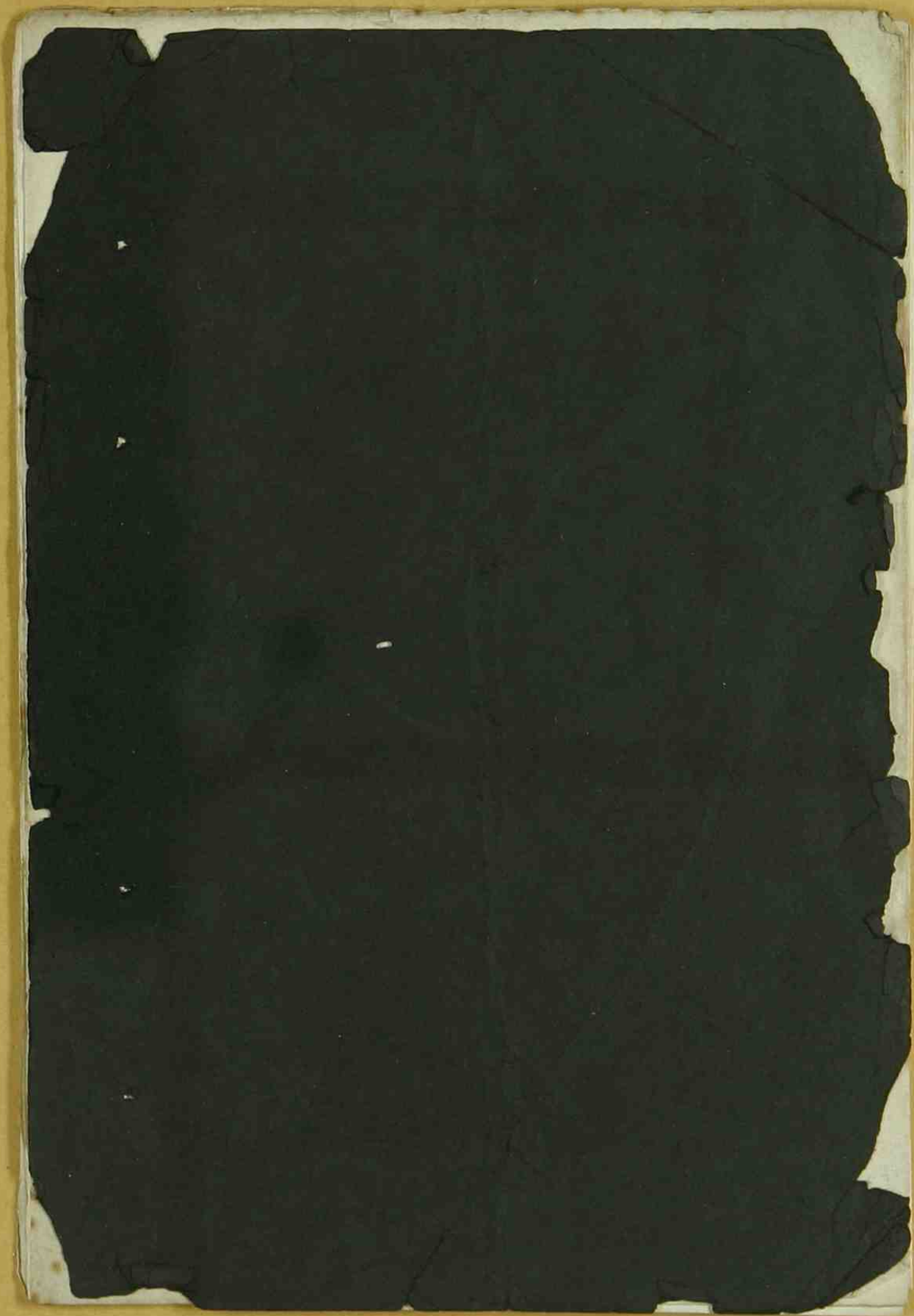
不許
複製

昭和八年四月二十日印刷
三才堂

非売品

編輯發行
吉川芳秋
名古屋市東區
堀町三丁目廿九

吉川芳秋



長崎大学附属図書館経済学部分館 武藤文庫所蔵

